

ジョークとドイツ人

押 野 洋

1 はじめに

ドイツ人とユーモア・笑い・ジョークについて触れたエッセイの類は、それがドイツ人であろうと非ドイツ人の手になるものであっても同じような書き出しをとることが多い。

『ドイツ（人）とは何か』の著者で英語英文学者のHans-Dieter Gelfertは、「ドイツ人のユーモア」に関する論考を「多くの外国人、とりわけイギリス人の目には、ドイツ人のユーモアは、そもそもそのようなものがあるとしても、発育不全の感がする」¹⁾と書き起こしている。『コメディ事典』の序文は以下のように始まっている。「ドイツ人はあまりにも笑わない、と世相研究者、社会学者、精神分析家は繰り返し言及している。ドイツ人が日々笑いに費やす時間を調べると、その結果は悲しくなるほどである。世界中でドイツ人ほど笑わない国民はほとんどいない」²⁾。今年（2010年）出版されたドイツ在住のアメリカ人コメディアンJohn Doyleの『Don't worry be germany（ドイツ人であることを心配するな）』ではこうである。「『ドイツ人にはユーモアがない』。この文言をアメリカ人、イギリス人、カナダ人、オーストラリア人、そしてそれどころかドイツ人自身からもしばしば聞くことがある」³⁾。中には日本人と関連付けたものもある。「ドイツ人やオーストリア人などのドイツ語圏人と日本人は、他の国の人から見ると、あまりユーモアがないと思われるのが共通点であると言えるだろう」⁴⁾。結局、ドイツ人とユーモア・笑いを論ずる場合には「ドイツ人にはユーモア感覚がない」という通説（あるいは偏見）から出発するケースが多いのである。

だが同時に、ドイツ人はジョーク好き、という事実も存在する。日本でも最近には主に新書版のジョーク集が何冊も出版されてジョークが以前よりは読まれているようだが、ドイツでのジョーク本の質と量の充実には到底太刀打ちできない。ドイツでは多種多様なジョーク集が刊行されているのだが、ドイツには豊富にあって日本には存在しない例として子供向けのジョーク本が挙げられる。6歳からのジョーク集も刊行されている⁵⁾。ジョークを理解するにはそれなりの知力が前提であり、おそらく6歳以下をターゲットとしたジョーク集はありえないであろう。高齢化社会を反映して、中高年・老年層向けのジョーク集も出版されている⁶⁾。また、地方主義という伝統を反映してドイツには地方・都市ごとのジョーク集も豊富である⁷⁾。さらに、日本にはないタイプのジョーク本としてドイツには個人編集のジョーク集もある。主にコメディアンの手になる本が多いのだが、変わり種として1969年から1974年まで連邦首相を務め1971年にノーベル平和賞を受賞したWilly Brandt（1913-1992）が集めたジョーク本も出版されている⁸⁾。

そして今、ジョークが最も隆盛なのはインターネットの世界である。ある研究者が調べたところ今から10年前の2000年の時点でドイツには、15312のジョーク関連サイトがあったそうである⁹⁾。仮に一日に一つのサイトを読むとしても、15312全部を読み通すには42年かかることになり、インターネット上のジョークの全てに目を通すのは不可能である。

イギリスのLaugh Lab（Lachlabor笑い実験室）という研究機関が、ジョークを最も好んで

長時間笑うのはどの国民か調べたところ、結果はイギリス人ではなくドイツ人であった¹⁰⁾。ユーモア感覚の欠如という烙印を長らく押し続けられてきたドイツ人は鬼の首を取ったように、この結果を吹聴している¹¹⁾。

このようなドイツ人のジョーク好きは、ドイツにはWitz (ジョーク) とKultur (文化) を結合したWitzkultur (ジョーク文化) という言葉が現に存在することからも理解できるであろう。そう、ドイツ人はジョーク好きな国民なのである。では、冒頭に記した「ドイツ人のユーモア感覚の欠如」という通説 (偏見) はどうなるのであろうか? ジョーク好きにも拘らずユーモアの欠落、というのは矛盾するのではないのか? 本論では、この問いに、「語りのジョーク」の内在形式を中核に据えて答えてみたい。「語りのジョーク」というのはジョーク本来の語って聞かせるジョーク、「語り」という形式をとったジョークの謂いである。

2 モノクロニックな時間と区画主義

ドイツ人のユーモア・笑い・ジョークをめぐるエッセイを読んでいると、面白いことに、ほぼ同じ内容を扱っている箇所にも何度か出会うことがある。だが幾度も出てくるにも拘らず、その重要性が今一つ理解しにくいのである。分かりにくさはそれがユーモア・笑い・ジョークとどう繋がっているのかその関係性が見えにくいという理由による。以下、幾つかあげてみよう。

- 1) 「ジョークを語る際に重要なのは、人生における遊びと真面目の峻別である」¹²⁾。
- 2) 「ドイツで職業的にユーモアと関わっている多くの人々は、絶えずすべてを切り離すという欲求を持っているようだ。真面目な事柄と日常的な事柄、政治と非政治との区別」¹³⁾。
- 3) 「ドイツ人は袋の中身を良く調べないで物を買う事を嫌う。もしその中にユーモアが

入っているのであれば、袋の表にそれを明記すべきなのだ。そうすればどう振る舞うべきか分かるし、いつ笑ってよいのか、笑ってはいけないのかが分かるのである」¹⁴⁾。

- 4) 「ドイツではいつ陽気になってよいのかいけないのかは、カレンダーが決めるのだろうか? 楽しみと真面目、ユーモアと仕事は常に分けられているのだろうか? この問いに対してもドイツには諺が存在する。

『仕事は仕事、酒は酒 (Dienst ist Dienst, und Schnaps ist Schnaps)』、これもまたドイツの秩序の一部なのである」¹⁵⁾。

2)だけがドイツ在住アメリカ人コメディアンで、それ以外は全てドイツ人の発言である。どうやら事柄の区別の重要性、ということをやっているらしい。この点を、日独のジョークの比較という枠内で述べているのがティル・ワインガートナーである。彼は、ドイツ人でありながらかつて日本で「アルトバイエルン」という漫才コンビの一人として活動し、現在はベルリンの大学で教鞭をとっている。そして、「予告されるジョークー日本人とドイツ語圏人のジョーク比較」の中で彼は、ドイツ語圏人はジョークを語る際に「このジョーク知っているかい」とか「これからジョークを聞かせるよ」と予告する、つまりジョークを言う前にジョークの空間を作り、聞き手に期待感を抱かせてからジョークを語り始めるが、日本人は、ジョークの空間を作ることなく話の流れでジョークを言う、と述べている¹⁶⁾。ワインガートナーのこの文言は日本人には理解しにくいのではないだろうか。理解しにくいというのは、前述の様に改めて指摘するまでもないことのように思えるからである。さらに言えば、ジョークを語る前にジョーク空間を構築してもしなくてもどっちでもよいのではと日本人なら考えている、ということである。だが、この点にこそドイツ人と日本人の相違点が潜んでいるのである。文化人類学者のEdwart T. Hallは、先ほど4例をあげて示した、

真面目と非真面目、ジョーク空間と非ジョーク空間との峻別を、ドイツ人の時間構成方法である「モノクロニックな時間」、並びに、空間を切り分ける「区画主義」という概念を用いて説明している。モノクロニックな時間とは「ドイツ人のように、一時に一つのことに集中する民族の特性である」。そしてそれに対し「ポリクロニックな時間は、地中海民族（そして日本人もこれに入る）の特性で、情報の海の中で生活し一度に多くのことに従事しうる。この二つの体系は、油と水のように決して混じり合わない」。さらに「ドイツ人は、時間を区画するのと同様に、空間をも区画化する。空間も時間もそれぞれ固有の単位に分割され、その単位は十分に保護される」¹⁷⁾ のである。この観点からみれば先のドイツ人の真面目と非真面目との区別、さらに彼らがジョークを語る前にジョーク空間を作り出すということの必然性も納得が行くであろう。

さらに、笑い・ユーモアと隣接する概念であるイロニー (Ironie) の捉え方にもドイツ人のこのモノクロニックな時間性と空間の区画性は如実に現れている。イロニーとは一般には、「意図とは反対の事を述べることで間接的に嘲ること」¹⁸⁾ の謂いであり、「イロニーはドイツでは人気がない。イロニーは『本来のものではない言説』と定義される。ドイツ人が主張するのはむしろ本来的な事柄である。何が問題なのか知りたい時、真面目と不真面目の間を揺れ動く語り方は大いに問題のあるものなのだ」¹⁹⁾。

3 ジョーク内の仕掛け

だが、ジョーク空間の構築は、ジョークを語る前に行われるだけではない。ドイツ人はジョークの中でもジョークの空間を作り出しているのである。言い換えれば、ジョークの語りの中でも「これはジョーク」というシグナルを出しているのである。それは言葉の問題であるが、ジョークだけに用いられる言葉が存在する訳で

はない。ジョークだけに使われる（あるいは使用を許される）文法上の仕掛けがあるのである。以下、具体例を挙げて説明してみたい²⁰⁾。

Witz ①

Treffen sich zwei Beamte auf dem Flur.

Sagt der eine zu dem anderen: »Na, kannst du auch nicht schlafen?« (S. 167)

(ジョーク ①)

公務員が二人、廊下で出会った。

一人が言う。「君も眠れないのかい？」

Witz ②

Kommt ein Schotte in Koblenz aufs Standesamt und will sich in Müller umbenennen lassen. Der Beamte fragt ihn: »Warum?« Darauf der Schotte: »Ich habe gestern im Zug einen Karton Visitenkarten gefunden« (S. 33)

(ジョーク ②)

スコットランド人がコブレンツの戸籍課にやって来て、ミュラーに改名したいと申し出る。役人が尋ねる。「どうしてですか」スコットランド人は答える。「昨日、列車の中で名刺一箱見つけたものですから」

Witz ③

Sagt Bauer Paulsen zu seiner blonden Gattin: »Wenn du richtig kochen und putzen könntest, bräuchten wir keine Haushälterin!« Die Bäuerin gibt ihm Kontra: »Und wir bräuchten keinen Knecht, wenn du abends nicht immer so müde wärest!« (S.237)

(ジョーク ③)

農夫のパウルゼンがブロンドの妻に言った。

「お前が料理と掃除をきちんとすることができれば、家政婦は必要ないのになあ」妻は反撃する。「あなたが夜、いつもあんなに疲れていなければ作男は要らないのにね」

いずれの例も今年(2010年)出版された最も新しいジョーク集の一つと思われる本から引いたものである。ジョーク①は「怠惰な公務員」というジョークの世界では定番のヴァリエーションである。が、内容はさておき、下線部に注目していただきたい。treffenとsagtという二つの動詞が文頭に置かれ定形(動詞や助動詞)第一位となっている。命令文と疑問文以外の平叙文では定形は第二位とすることになっているので、通常であればこれは破格(文法的に誤り)の文となる。本来であれば、この2文は以下のようになるところである。

Zwei Beamte treffen sich auf dem Flur.

Der eine sagt zu dem anderen.

ジョーク②も「ケチなスコットランド人」というお決まりのジョークである。下線部のkommtが通常は破格とされる文の先頭に移動している。さらに、ジョーク③でも動詞(定形)のsagtが文頭に立ち定形第一位となっている。

このように通常は誤りとされる平叙文での定形第一位がジョークの世界では許されるのである。それはどうしてかといえ、通常は破格とされる文を用いて、これは通常とは異なるジョークの世界なのだ、というシグナルを送っているからである。もちろん、この手法はジョークでは常に使われている訳ではないが、しばしば使われていることも事実である²¹⁾。

この定形第一位以外にも、通常は使われずジョークにのみ頻繁に用いられる仕掛けは幾つかあるのだがここでは割愛する²²⁾。

予告されてジョークが始まるように、ジョークの終わりも明示されなければならない。といっても、終了の合図はジョークの語り手ではなく聞き手によるものである。「外面上ジョークであることを示す特徴として、ジョークが語られた後、聞き手は反応を示さなければならない。呵呵大笑、とは言わないまでもにこやかに微笑

む、あるいは褒める、自分からジョークを提示する、さらには批判するなどしなければならぬ²³⁾」のである。

4 最後に

ドイツのジョーク自体は決してつまらないものではない。確実に笑えるものもある²⁴⁾。ただ、ジョークの語り方、より正確に言えば、ドイツ人の空間・時間の捉え方に基づいたジョークの語り方が画然としすぎているので、そこにユーモアの介在する隙、ゆとりがないのである。真面目と不真面目の境界線上から生まれる緩み、曖昧さ、といったコミカルさの源泉の存在を認めないのである。ドイツ人もこの点には気づいているようで、ドイツ民俗学の第一人者であるHermann Bausingerは「ジョークを披露しあうグループは、笑いの効果にも拘らず、陽気というより骨の折れる儀式のようだ」と記している。儀式である以上、「ジョークには一種の聞く義務、ないしは聞き流しはタブーという考えがまわりついており」²⁵⁾、たとえそのジョークが面白くなかった場合でも「『楽しまなければならない』という決まり文句がある。多くのドイツ人は、語られたジョークが本当に面白いかどうか確信がもてないときそう言うのである」²⁶⁾。その結果、「ドイツ人はジョークを他人から聞かされるのは好きではないが、それだけに他人に語るの大好き」²⁷⁾という歪んだ構図が成立するのである。このようなドイツ人とジョークの関係性を知って思わずほくそ笑むのは筆者だけであろうか。

(附記)

本論は2010年5月15日に行った「日本笑い学会」関東支部第163回研究会(台東区民会館)での講演「ドイツのジョークを糸口にドイツ(人)を語る」が下敷きとなっている。講演の機会を与えてくれた「日本笑い学会」関東支部に改めて感謝する次第である。

注

- 1) Hans-Dieter Gelfert: Deutscher Humor. In: Was ist deutsch? Wie die Deutschen wurden, was sie sind. München (C.H.Beck) 2005, S. 169
- 2) Sonja-Ilonika Wagner: Deutschland lacht!. In: Comedy-Lexikon. Berlin (Schwarzkopf & Schwarzkopf) 1999, S.4
- 3) John Doyle: Humor. In: Don't worry be germany. Frankfurt am Main (Scherz) 2010, S.199
- 4) ティル・ワインガルトナー「予告されるジョークー日本人とドイツ語圏人のジョーク比較ー」『笑いの世紀 日本笑い学会の15年』日本笑い学会編 創元社 2009年 350ページ
- 5) 例えば、Die schönsten Kinderwitze. Edition Bücherbär. Würzburg (Arena) 2005 この本の背表紙にはab 6 (6歳以上)と記されている。
- 6) 例えば以下の本。Lachen hält jung! Witze für Menschen in besten Jahren. St. Gallen (Otus) 2009
- 7) 筆者(押野)が持っている地方・都市のジョーク集には以下のものがある。「ベルリン・ジョーク集」「ハンブルク・ジョーク集」「ミュンヘン・ジョーク集」「ケルン・ジョーク集」「プロイセン・ジョーク集」「バイエルン・ジョーク集」「ニーダーザクセン・ジョーク集」「シュヴァーベン・ジョーク集」「バーデン・ジョーク集」
- 8) Willy Brandt: Lachen hilft. Politische Witze. München (Piper Verlag) 2004
- 9) Rolf W. Brednich. In: www.worldwidewitz.com. Freiburg (Herder) 2005 S. 13
- 10) Richart Wiesman. In: The British Association for the Advancement of Science, [LaughLab], 2001
- 11) 例えば以下の2冊。Jutta Gay: Witze. In: 1000 Gründe, Deutschland zu lieben. Von Asbach Uralt bis Zeitgeist: Was ist "typisch deutsch" (ドイツが好きな1000の理由、アスバッハウアアルトから時代精神まで、ドイツ的なものとは何か) Hamburg (Moewig)「ところでよりにもよってイギリスの「Laugh Lab」というユーモア研究の学問的研究所が、ジョークを最も好み、最も長い時間笑うのはどの国民か調べた。その国民は、イギリス人。大外れ。正解はドイツ人であった」(707ページ)。
Christian Schlesiger, Marcus Werner: Deutschland: sehr gut. Wir sind viel besser als wir denken! (ドイツ、極めて優秀。我々は自分たちが考えているよりずっと良いのだ) Köln (Fackelträger) 2010「我々ドイツ人は特殊なジョークを特に好むということはなく、どのジャンルのジョークにも押し並べて笑うという傾向がある。先の研究によれば、ドイツ人はテストとして取り上げられたあらゆる分野からのジョークを可笑しいと感じ、それによって一位となったのである。2番目にそれらのジョークを楽しんで笑ったのがフランス人、その次がデンマーク人であった。そして我々にこのことを証してくれたのは、よりにもよって洗練された笑いが依然として国民財産であり、質の高い娯楽の発祥の地であるイギリスの研究なのである。この島国の人々は4位にしかならなかったが」(44ページ)。それにしてもこの本のタイトル『ドイツ、極めて優秀、我々は自分たちが考えているよりずっと良いのだ』は何なのだろうか。ドイツ人も日本人同様、他国の視線を気にする国民と言われている。そのためドイツ(人)論の類書はきわめて多い。第二次世界大戦を引き起こし、世界史に汚点を残してしまったナチスの蛮行により、戦後、ドイツは周囲の国々の意向を迅速、敏感に察知して国の舵取りをしなければならなかった。さらに周囲の有形・無形の抑圧がドイツ人に絶えざる自己反省と低い自己評価を強いてきたのも事実で、自国に対する自虐的な姿勢は長らく知識人の身につけるべき属性とされてきた。ドイツで「健全な愛国主義」が論議されだしたのは2006年のドイツでのワールドカップ開催が成功裡に終わった頃からであった。
- 12) Martin Hecht: Witze erzählen. In: Deutsche Unsitten. München (Piper) 2009, S.288
- 13) John Doyle, a. a. O., S.203
- 14) Wolfgang Koydl: Von Lach- und Schließmuskeln: Der deutsche Humor. In: Gebrauchsanweisung für Deutschland. München (Piper Verlag), 2010, S.219
- 15) Christoph Henn: Spaß muss sein - aber wie. In: Deutsch perfekt 2/2007, München S.59
- 16) ティル・ワインガルトナー、上掲書354-356ページ
- 17) エドワード・T・ホール、ミルドレッド・リード・ホール 勝田二郎訳『かくれた差異 ドイツ人を理解するために』メディアハウス出版会 1986年 第2章「日本人のためのドイツ人論・ドイツ文化」62-91ページ
- 18) Pons Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache. S.678
- 19) Hermann Bausinger: Verstehen sie Spaß? In: Typisch deutsch. Wie deutsch sind die Deutschen? München (C.H.Beck) 2000, S.92
- 20) Hanns G. Laechter: Der grosse Witze Hammer. München (Heyne) 2010 3つのジョークの後に引用ページを記しておく。
- 21) この手法はジョークの緊張感を高める機能も果たしている。緊張感が頂点に達した瞬間に

- 「落ち」となり、緊張感は一気に解消されるのである。
- 22) これについては拙論を参照されたい。押野洋「ドイツのジョーク (Witz) の文体的特徴」二松学舎大学国際政経論集第11号 2005年 69-78ページ
- 23) Peter Köhler: Nachwort zu dem Witzbuch. Stuttgart (Reclam) 2003, S. 268
- 24) あるジョークを面白いと感じるか否かには当然ながら個人差がある。ロシア語同時通訳の第一人者でエッセイスト・小説家でもあった米原万理 (2006年没) は笑い・ジョークにも造詣が深く、笑いの仕組みを解き明かした『必笑小咄のテクニック』の著書もある。笑いに対して厳しい鑑識眼を備えた彼女によれば、ジョーク本に収められているジョークの笑いのヒット率は1%で、インターネット上のジョークになるとヒット率は0.1%に低下するらしい。が、あまり笑えないジョーク本が蔓延する中であって驚異のヒット率30%を誇るのが『ユダヤ・ジョーク集』(M・トケイヤー編纂 加藤英明訳 講談社+α文庫)との事である。(『打ちのめされるようなすごい本』文藝春秋 2006年 57-59ページ)。日本語で読むことのできるドイツジョーク集は数冊あるが、筆者(押野)がお勧めするのは『ドイツ産ジョーク888ワッハッハ』(田中紀久子訳編 アートダイジェスト 2009年)。短めのジョークばかりだが、思わずにやりとさせられる秀作揃いである。この本を読んで米原氏なら笑い率何パーセントとはじき出したであろうか?
- 25) Martin Hecht, a. a. O., S.287
- 26) Christoph Henn, a. a. O., S.59
- 27) Martin Hecht, a. a. O., S.287